



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	スタインベック、スナイダー、カリフォルニア - 場所の文学の系譜 -
Author(s)	山里, 勝己
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(48): 93-110
Issue Date	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3588
Rights	

スタインベック、スナイダー、カリフォルニア —場所の文学の系譜—

山里 勝己

1 スタインベック、スナイダー、カリフォルニア

ジョン・スタインベックとゲーリー・スナイダーは両者ともにアメリカ西部の書き手であり、カリフォルニアの自然環境に焦点を合わせて作品を書いている。そしてその作品は「場所の文学」(Literature of Place) とでも呼ぶべき特徴を有している。すなわち、両者ともある特定の場所に定住または再定住し、その場所と自らの関係性を見つめる中で思索を深めた書き手である。スタインベックのサリーナスやモンレー、あるいはカリフォルニア湾、そしてスナイダーのシエラネヴァダの森はその作品と切り離しがたいイメージとして定着しているはずである。本稿のタイトルはこのような背景を反映する。¹

本稿では、スタインベックとスナイダーを比較対照し、そうすることで「場所の文学」を理解し、そのカリフォルニアにおける系譜を浮き彫りにすることを試みてみたい。以下、スナイダーは詩を中心として、スタインベックは『コルテスの海航海日誌』(*The Log from the Sea of Cortez*) に焦点を合わせて考えてみる。

2 ネイチャーライティング、環境文学、または場所の文学

「場所の文学」はいまだその定義が流動的な用語である。それは、それぞれに微妙なニュアンスの差はあるものの、「ネイチャーライティング」(Nature Writing) や「環境文学」(Environmental Literature) という用語と互換性を有するからだ。ジョン・エルダー (John Elder) 編の *American Nature*

Writersで「ネイチャーライティング」は次のように定義される—"One basic definition of the genre [nature writing] might be as follows: personal, reflective essays grounded in appreciation of the natural world and of science, but also open to the spiritual meaning and value of the physical creation" (xiii)。この定義を読むと、エルダーが、基本的には「ネイチャーライティング」はエッセイ（ノンフィクション）を主要な構成要素とするジャンルであると考えていることが理解される。この点で言えば、スタインベックの『コルテスの海航海日誌』はこの定義の枠組みに当てはまるだろう。実際、これまでに出版された「ネイチャーライティング」に関する主要なアンソロジー、たとえば、トーマス・ライオン(Thomas Lyon) 編の *This Incomperable Lande* (1989) やロバート・フィンチとジョン・エルダー (Robert Finch and John Elder) 共編の *The Norton Book of Nature Writing* (1990) は散文だけを集めたものだ。ちなみに、ノートン社のアンソロジーはスタインベックからは『コルテスの海航海日誌』の序章と『怒りの葡萄』第3章の"a land turtle"の描写を収録している。

しかし、エルダーは、先の定義のすぐ後でこの定義から排除される自然を描く文学に言及し、この枠組みの包含する問題点を認めている。すなわち、ノンフィクションを基礎とするこの枠組みでは、例えば、詩、小説、演劇などが排除されてしまうのだ。

"Nature Writing"という用語に不満をもつ作家や批評家も多い。これまで、人間と自然環境との関係性を前景化する文学を指すものとして、たとえば、Environmental Literature、Environmental Writing、Literature of Nature、Nature Oriented Literature、Landscape Writing、あるいは Literature of Place など、様々な用語が「ネイチャーライティング」に代わるものとして提唱されてきた。近年は、より包括的でニュートラルな意味を持つものとして Environmental Literature を用いる研究者が増えてきている。「環境文学」はこの用語の日本語訳である。しかしこの分野はいまだ進化の途中にあり、その境界は揺れ続ける。そして、いま流通しているその名称が与えるステロタイプの印象と異なり、このジャンルは際だって特殊なものというわけでもない。

バリー・ロベス (Barry Lopez) はアメリカ文学におけるこのジャンルの流れについて次のように述べている。

In fact, writing that takes into account the impact nature and place have on culture is one of the oldest—and perhaps most singular—threads in American writing. Melville in *Moby-Dick*, Thoreau, of course, and novelists such as Willa Cather, John Steinbeck, and William Faulkner come quickly to mind here, and more recently Peter Matthiessen, Wendell Berry, Wallace Stegner, and the poets W.S. Merwin, Amy Clampitt, and Gary Snyder. (n.p.)

ロベスのいう「自然と場所が文化に及ぼす衝撃を考慮する」文学は、名前が挙げられている書き手を見る限りにおいて、それはアメリカ文学において初期から連続と連なる流れのひとつと言える。本稿では、特にカリフォルニアという場所、そしてその中でもとくに書き手が意識的に定住することを選択し、そこで作品を生み出した特定の場所に限定して論を展開するため、「場所の文学」(Literature of Place)という用語を使用することにしたい。ロベスは "A specific and particular setting for human experience and endeavor is, indeed, central to the work of many nature writers" (n.p.) と述べているが、このような作品群が「場所の文学」と呼ばれるのであり、スタインベックとスナイダーはそのような文学の代表的な書き手である。

それでは、具体的にどのようなディスコースが「場所の文学」の特徴を示しているのだろうか。次の一節は『コルテスの海航海日誌』からの引用で、スタインベックが日本の漁船団の底引き網漁が環境またはひとつの場所に与える衝撃に対してコメントしたものである。

We liked the people on this boat very much. They were good men, but they were caught in a large destructive machine, good

men doing a bad thing. . . . We in the United States have done so much to destroy our own resources, our timber, our land, our fishes, that we should be taken as a horrible example and our methods avoided by any government and people enlightened enough to envision a continuing economy. . . . The Mexican official and the Japanese captain were both good men, but . . . they were committing a true crime against nature and against the immediate welfare of Mexico and the eventual welfare of the whole human species. (297-98)

日本の船員たちの善良さと、彼らが「大型の破壊的な機械の一部にされて不正な仕事に荷担する結果になって」（仲地 419）いることを指摘した後で、スタインバックはアメリカ合衆国における森林や耕地や魚類などの資源破壊に言及することを忘れない。² この文章を読んでいて、1980年代から90年代にかけて急速に拡大した環境運動の言説を目にしているような印象を持つ読者もいるにちがいない。これは20世紀の「場所の文学」に基本的に内包される危機意識が前景化されたものであるが、しかし、グランドスタインとグランドスタイン（Gladstein and Gladstein）が次の文章で指摘しているように、これがきわめて先駆的な視点で書かれた文章であることもまた事実なのである。

Steinbeck saw that what was happening to one group of fishermen could happen worldwide. He proved prophetic. Today the debate over fishing practices employing these and similar methods still rages. . . . The state of California recently banned the use of these nets within its waters, as have the states of Washington and Oregon. (169)

スタインバックは、ある一つ国のやり方、例えば、日本の漁法だけを批判するのではなく、アメリカをも含めて、自然破壊に狂奔する近代工業文明のあり

ように批判しているのである。この点で、ここでの自然環境破壊の描写は、ブルドーザーで土地を追われる『怒りの葡萄』の農民たちの姿と重なる。ブルドーザーは、機械化された日本の漁船と同様に、伝統的な生活と場所の文化を破壊していく近代工業文明の象徴になっているのである。

あるジャンルの定義は、普通は先行するモデルの枠組みの中で考えられてきた。ネイチャーライティングあるいは場所の文学もその例にもれないが、現在では、このジャンルの構成要素をノンフィクションだけに限定することは難しくなっている。現代アメリカにおける自然と人間を描く文学の豊穡さと多様さ、そしてこのジャンルにおける研究の急激な進展は、このジャンルの再定義を要請しているのである。ちなみに、*American Nature Writers*でスナイダーを担当しているのはパトリック・D・マーフィー (Patrick D. Murphy) であるが、その論文の半分は時の分析に費やされる。また、1990年代後半から21世紀初頭にかけて次々と出版された「ネイチャーライティング」または「環境文学」に関する論集は、研究対象を「エッセイ」や散文に限定することなく、多様、多彩なジャンルの作品を取り上げるようになってきている。

3 場所の感覚—スタインベックとスナイダーの例

場所の文学の最も顕著な特徴の一つは、人間と場所または自然環境の関係性を模索し、その中から新たな人間像、あるいは自然像を構築しようとするところである。盛期モダニズムの多くの作品が都市を漂流する人物たちに焦点を合わせたとすれば、1930年代以降のスタインベックに代表される書き手たちのひとつの特徴は特定の場所に回帰していく動きであると言ってよい。スタインベックのカリフォルニア、ウイラ・キャザーの中西部が顕著な例であろう。あるいは、モダニズム文学の中でも、フォークナーのように南部にとどまったまま作品を書き続けた作家もいる。この文学の核心にあるのは、環境問題だけではない。それが重要な要素であり背景になっていることは間違いないが、書き手が究極的に目指すのは新しい人間像であり、新しい世界像である。あるいは、この文学の基底にあるものは人間はいかに生きるべきかという、古くて新しい

問題なのである。

場所の文学の書き手たち、つまり、あるひとつの場所に回帰して行った書き手たち、あるいはひとつの場所にとどまった書き手たちがよく使う用語に「場所の感覚」(sense of place)がある。これは、自らが住む場所に関する詳細な知識のことを指し、そのような知識を基礎にして自らのアイデンティティーや人間像が生まれてくる。これはまた、土壌学、植物学、地質学、その場所の歴史や文化を含む、きわめて包括的な概念である。そして、また、これは蓄積された時間と反復される身体的学習により獲得された知識に基づいた場所と人間との関係性を指す言葉でもある。リチャード・アストロ (Richard Astro) がスタインベックの「場所の感覚」について次のように述べている。

... Steinbeck's sense of place led him to develop a meaningful response to the gathering ecological crisis and its causes. And the findings of contemporary scientific ecologists simply confirm Steinbeck's indictment of the self-aggrandizing way of life that he found so characteristic of too many Americans. His sense of place led him to a metaphysical conclusion about the unity of all experience which is manifest in the thematic design of this fiction and which above all condemns man's arrogant conception of himself as unique from and independent of the rest of nature. (26)

この引用はスタインベックの人間観を簡潔に要約したものである。すなわち、スタインベックはアメリカ人の特徴的な生き方と自然環境との関係性を批判し、自然から屹立したものとして自らをとらえる人間の傲慢さとその破壊性を先駆的に理解していたとアストロは指摘する。スタインベックの場所の感覚に基づいた作品は、現代科学に先駆けるものであったことをアストロは指摘する。場所の感覚は、人間の生き方に対する鋭い洞察をもたらすのである。

次の一節もアストロからの引用であるが、これもスタインベックのエコロジカルな人間観を指摘した文章である。人間は、自らが住む場所と複雑で切り離

しがたい相互関係を有していること、そして『コルテスの海航海日誌』の登場人物たちの振る舞いでスタインベックが表現しようとした危機感は現代の自然環境の危機に反映されているとアストロは指摘する。

Steinbeck's awareness of the inextricable interrelationships between man and his environment as it is manifest in his personal metaphysics as expressed in *Sea of Cortez* and in the behavior of his most memorable characters is simply a more poetic way of affirming what scientists are now telling us about the threats to our rivers, our valleys, to our mountains, and to our oceans. (27)

アストロ自身がどのように考えているかは別として、アストロのスタインベック批評は、場所の文学の観点から言えば、“Ecological Criticism”あるいは“Ecocriticism”の範疇に見事に収まるものとなっている。すなわち、簡単に言えば、この批評は、文学作品の中に表現された自然環境とその中に存在する人間の意味、自然と人間の関係性、あるいはその表象のありようを研究する方法なのである。

次にスゲーリー・ナイダーの作品を検討してみたい。スナイダーはカリフォルニアに住み、「場所の感覚」を前景化する詩人である。そして、その自然観と人間観は驚くほどスタインベックに近いものがある。たとえば、次の二つの引用を比較検討してみよう。ひとつは、『コルテスの海航海日誌』からの引用であり、もうひとつはスナイダーの短い叙情詩一編を全編引用したものである。

And it is a strange thing that most of the feeling we call religious, most of the mystical outcry which is one of the most prized and used and desired reactions of our species, is really the understanding and the attempt to say that man is related to the whole thing, related inextricably to all reality,

known as unknowable . . . plankton, a shimmering phosphorescence on the sea and the spinning planets and an expanding universe, all bound together by the elastic string of time. It is advisable to look from the tide pool to the stars and then back to the tide pool again. (257)

これはアストロも指摘するように、人間と世界、あるいは宇宙との関係を理解しようとする文章である。ここには、人間が孤立して存在するものではなく、人間が全体と切り離しがたく結びついて存在しているという"holistic"な考え、相互依存を強調する世界観が伺えるのである。小さな潮だまりは星を散りばめた大宇宙の縮図であり、宇宙に存在するものはすべて相互依存するのである。それでは次にスナイダーの作品を見てみよう。

BURNING THE SMALL DEAD

Burning the small dead

branches

broke from beneath

thick spreading

whitebark pine.

a hundred summers

snowmelt rock and air

hiss in a twisted bough.

sierra granite;

Mt. Ritter —

black rock twice as old.

Deneb, Altair

windy fire

(*The Back Country* 13)

ホワイト・パーク・パインはシエラ・ネヴァダ山脈の樹木限界線に見られる木であるが、樹皮には銀色の光沢がある。そこからその名称がきている。この詩の語り手は、いまその枯れ枝を燃やしているのである。それはただの枯れ枝ではなく、かつては生命を有していたが、いまでは「死んだ」(dead)状態になってしまっているものである。この詩の分析にはそのタイトルの引用は不可欠である。すなわち、読者がタイトルから受ける印象と、一行目と二行目の間に置かれた驚きは計算されたものであり、その驚きのなかに詩人の生命観が表象されているからだ。タイトルの"the small dead"は、「死者たち」を暗示する。「死者たちを燃やす」ということは、それは死の儀式であり、それはまた同時にホワイト・パーク・パインが叙情詩の背景をなす単純な物理的存在ではなく、一個の生命体として感受されていることを示唆する。

いま、「死んだ」、あるいは「枯れた」ねじれた枝で音を立てて燃えているものは100年もの間シエラネヴァダの雪解け水と花崗岩と大気で育っていた生命である。語り手の意識は、やがて眼前で燃える火からリッター山（これも地球の始原の光景のなかで、突然に巨大な火の塊として出現してきたものであろう）に沿って宇宙に拡大し、宇宙の深部で淡く燃えるデネブやアルタイルに到達すると、再び目の前で風に揺れる火に戻ってくる。ここには宇宙の一体性と連続性が暗示され、存在の相互浸透性、相互依存性が暗示されている。エコロジーや、この頃にすでに読み始めていた仏教の影響もあるのであろうが、幼少のころから慣れ親しんだ西部の大自然によって培われた「場所の感覚」がなによりも先行しているように思われる作品である。潮だまり (tide pool) から惑星 (stars) へと意識を拡大し、それから再び目の前にある潮だまりへと意識を収斂させることでマクロコズムとマイクロコズムの構造の類似性、そしてそこに生きるすべての存在の連続性を示唆するスタインバックの語り手と、眼前で風

に揺れるたき火を見つめながら宇宙で燃えるいくつかの「火」(stars)を同時に捉えて結びつけるこの詩の語り手の意識は、基本的にはスタインベックとスナイダーがその発想と世界観を共有していることを示唆する。

もうすこし両者の比較をしてみたい。最初は『コルテスの海航海日誌』からの引用である。

Tiny at the wheel inveighed against the waste of fish by the Japanese. . . . But all the fish actually were eaten; if any small parts were missed by the birds they were taken by the detritus-eaters, the worms and cucumbers. And what they missed was reduced by the bacteria. What was the fisherman's loss was a gain to another group. We tried to say that in the macrocosm nothing was wasted, the equation always balances. . . . There is not, nor can there be, any actual waste, but simply varying forms of energy . . . but to the whole, there is no waste. The great organism, Life, takes it all and uses it all. The large picture is always clear and the smaller can be clear—the picture of eater and eaten. (313)

船の舵を握っているタイニーは日本人たちが魚を無駄にしていると非難する。しかし、これに対して語り手は「大宇宙では無駄なものは何ひとつなく、均衡がつねに保たれている(中略)実際、無駄なものは何もないし、無駄なものがあるはずもない。ただ、エネルギーの形態が変化するだけなのだ(中略)大宇宙の構図はつねに明快であり、小宇宙の構図もはっきりしている。つまり、補食するものと補食されるものがあるということだ」(仲地 436-37)と主張する。これがスタインベックの宇宙観であることは明白だ。つまり、この宇宙で食べるという行為は、エネルギー交換を行うことであり、上に引用した文章は食物連鎖の公式を明晰に述べたものなのである。スタインベックが言うように、「エネルギーの形態が変化するだけなのだ」。これは「コルテスの海」の詳細な

調査と、長年にわたるこの海をめぐる思索で培われた「場所の感覚」に基づく
スタインベックの確信のようなものであろう。

次にスナイダーの詩を見てみたい。

SONG OF THE TASTE

Eating the living germs of grasses

Eating the ova of large birds

the fleshy sweetness packed
around the sperm of swaying trees

The muscles of the flanks and thighs of

soft-voiced cows

the bounce in the lamb's leap

the swish in the ox's tail

Eating roots grown swoll

inside the soil

Drawing on life of living

clustered points of light spun

out of space

hidden in the grape.

Eating each other's seed

eating

ah, each other.

Kissing the lover in the mouth of bread:

lip to lip.

(Regarding Wave 17)

自然界は、かつてテニスンが *In Memoriam* で嘆いたように、もはや「牙と爪を血まみれにして」("Nature, red in tooth and claw") 争う弱肉強食の世界ではない。この世界はアメリカ先住民の言葉で言えば「贈り物を交換し合う祝宴」(ポトラッチ) の場なのである。全てが相互依存するこの世界では、食べるという行為はついにひとつの聖なる儀式となり、生命に対する感謝と深い畏敬の念に裏打ちされた愛の行為となる。

スナイダーの主語を示さない表現方法は、人間は生態系＝場所の中で屹立する存在ではなく、全てがつながり合い相互依存する生命の網の目の中のひとつの存在にすぎないという考え方を示唆する。つまり、この詩は全ての存在が捕食者 (eater) であり補食されるもの (eaten) であることを暗示するのである。上に引用したスタインベックの散文—"The large picture is always clear and the smaller can be clear—the picture of eater and eaten"—で表象された食物連鎖の世界が、スナイダーの具体的な詩的イメージでふたたび表象されているのである。スナイダーは仏教とエコロジーを融合し、さらにアメリカ先住民の世界観をも取り入れてきた詩人である。その宇宙観、生命観はこのような要素が融合されたものである。しかし、この詩は明らかにスタインベックの考え方とつながる新しい人間像を示唆し、人間と生態系のエコロジカルな関係性を明示するものとなっている。つまり、両者とも、補食するものと補食されるものとのエネルギー交換のサイクルについて語っているのである。そして、これが宇宙の実相であることも。

4 カリフォルニアと場所の文学—ひとつの系譜

Columbia Literary History of the United States (1988) の指摘を待たずともなく、スナイダーは1950年代後半からこのような傾向の思索を深めてき

た(1066)。レイチェル・カーソン (Rachel Carson) の『沈黙の春』(*Silent Spring*) が出版されたのは1962年のことである。そして、スタインベックに関して言えば、米国でアース・デイ (Earth Day、4月22日) が始まる1970年より30年も前にエコロジカルな思索を深め、そのような思想に基礎を置いた作品を出版しているのである。しかし、さらに歴史をたどって行けば、1903年に出版されたメアリー・オースティン (Mary Austin) の『雨の降らない土地』(*The Land of Little Rain*) にもエコロジカルな思想の萌芽を見ることができる。次の二つの引用が明白にこのことを語っている。

Cattle once down may be days in dying. They stretch out their necks along the ground, and roll up their slow eyes at longer intervals. . . . It is doubtless the economy of nature to have the scavengers by to clean up the carrion. (33)

Man is a great blunderer going about in the woods. . . . There is no scavenger that eats tin cans, and no wild thing that leaves a like disfigurement on the forest floor. (40)

オースティンはシエラ・ネヴァダ山脈の東側、インヨー郡に住んで砂漠と先住民の世界を見つめていた作家である。その「場所の感覚」は、砂漠の自然と動植物、そしてそこに生きる人間を見つめるなかで培われた。砂漠の食物連鎖や人間の自然環境に対する振る舞いを描いたオースティンの醒めたまなざしは、シエラネヴァダの西側で「場所の感覚」を研ぎ澄ました書き手たちであるスタインベックとスナイダーのまなざしにはっきりとつながっていく。いずれも、ひとつの場所に定住をすることで、自然環境と人間に関する深い洞察を獲得することができた書き手たちである。場所の文学の源流は、ヘンリー・D・ソローにまでたどることができるだろう。あるいはもちろんさらにさかのぼることも可能であろうし、いまそのような研究が進展しつつある。カリフォルニアで言えば、オースティンやその同時代人であったジョン・ミュア (John Muir)

から連なる文学の系譜が大きな流れとしていま浮かび上がろうとしている。

スタインベックやスナイダーの文学はこのような伝統の先端で書かれてきた。その系譜は、20世紀初頭、1930年代、そして1950年代と、点と点がつながり、20世紀半ばから後半にかけて大きな流れを形成しつつある。そしてそのような文学が教えるものはエコロジカルな世界像に立脚した新しい人間像であり自然環境の姿なのである。

最後にスナイダーをもう一度引用したい。

The dialogue to open next would be among all beings, toward a rhetoric of ecological relationships. This is not to put down the human: the "proper study of mankind" is what it means to be human. It's not enough to be shown in school that we are kin to all the rest: we have to feel it all the way through. Then we can also be uniquely "human" with no sense of special privilege. (*The Practice of the Wild* 68)

『コルテスの海航海日誌』を読んでいると、ほぼ半世紀後に書かれたこの文章に、スタインベックは基本的には同意するのではないかという気がしてくる。スタインベックは人間の傲慢さを批判し、自然環境から自らを切断する人間像を否定した。スナイダーも人間に特権を認めず、すべての存在と対話をすることで未来を開き、新しい人間像を模索しようとする。このようなスタインベックとスナイダーの文学と思想は、カリフォルニアの大地と海洋を知り尽くす中で生まれてきた「場所の感覚」に基礎を置く。われわれはいま場所と文学の関係性に新しい意味を付与しながら、「場所の文学」の系譜を再発見しようとしている。そして、それは、カリフォルニアにおいては、ジョン・ミュアやメアリー・オースティンから連なる系譜を受け継ぎ、その流れをさらに深く豊かなものにする文学なのである。

*本稿は第22回日本スタインベック学会（1998年5月25日、仏教大学）におけるシンポジウム「スタインベックとネイチャーライティング」で"Snyder, Steinbeck, and Sense of Place"と題して発表した論考に基づいていることをお断りしておきたい。

Notes

¹ 1998年3月、スナイダーは仏教伝道協会賞を受賞し、その授賞式のために来日したが、その時にスタインベックとの関係について質問してみた。スナイダーは1930年生まれであるから、『怒りの葡萄』が出版されたときは9才か10才であったが、後にこの作品を読み、大恐慌の影響で苦しい生活をしていた自分の家族や周囲の人たちの様子がよく書かれていること、西部の生活を説得力を持って描いていることなどが印象に残っているとスナイダーは述べた。そして、これは重要な事なのだが、東部に引きつけられずに、西部の詩人として生きていくためのインスピレーションを与えてくれたのがスタインベックであった、とスナイダーは発言したのである。このようなスナイダーの「場所の文学」に関する詳細な分析については、山里勝己「ゲーリー・スナイダーと『場所の文学』」を参照していただきたい。

² 『コルテスの海航海日誌』の解釈については、仲地訳を参照した。

Works Cited

Astro, Richard. "From the Tidepool to the Stars: Steinbeck's Sense of Place." *Steinbeck Quarterly*, 10.1 (1977): 22-27.

Austin, Mary. *The Land of Little Rain*. 1903. Albuquerque: U of New Mexico P, 1974.

Barry, Lopez. "Literature of Place." 7 Oct. 2003. http://arts.envirolink.org/literary_arts/BarryLopez_LitofPlace.html.

Carson, Rachel. *Silent Spring*. 1962. New York: Penguin, 1991.

- Elder, John, ed. *American Nature Writers*. 2 vols. New York: Scribner's, 1996.
- Elliot, Emory. gen. ed. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988.
- Finch, Robert, and John Elder, eds. *The Norton Book of Nature Writing*. New York: Norton, 1990.
- Gladstein, Clifford Eric, and Mimi Reisel Gladstein. "Revisiting the Sea of Cortez with a 'Green' Perspective." *Steinbeck and the Environment: Interdisciplinary Approaches*. Ed. Susan F. Beegel, Susan Shillinglaw, and Wesley N. Tiffney, Jr. Tuscaloosa, AL: U of Alabama P, 1997. 161-75.
- Lyon, Thomas J., ed. *This Incomparable Land: A Book of American Nature Writing*. Boston: Houghton, 1989.
- Murphy, Patrick D. "Gary Snyder." *American Nature Writers*. Ed. John Elder. 2 vols. New York: Scribner's, 1996.
- Snyder, Gary. *The Back Country*. New York: New Directions, 1968.
- . *Regarding Wave*. New York: New Directions, 1970
- . *The Practice of the Wild*. San Francisco: North Point, 1990.
- Steinbeck, John. *The Log from the Sea of Cortez*. 1941. New York: Penguin, 1986. 邦訳は仲地弘善『コルテスの海航海日誌』（スタインベック全集第11巻）大阪：大阪教育図書、1997.
- 山里勝己「ゲーリー・スナイダーと『場所の文学』」『アメリカ文学ミレニアムⅡ』東京：南雲堂、2001. 299-315.

Steinbeck, Snyder, California: A Tradition of Literature of Place

Abstract

John Steinbeck and Gary Snyder write focusing on a specific place in California. Snyder writes about Northern California, and Steinbeck focuses on Central California, especially Monterey and Carmel. What we see in their works representing the specific places is their attempts to deepen their sense of place.

"Sense of place" is a term now frequently used by those who come under the rubric of "Nature Writing," and it refers to an accumulated natural/environmental knowledge concerning a place that enables the writer to conceive humanity in a new light. Thus, a sense of place encompasses a broad range of knowledge including history, climate, botany, geology, etc. In a sense, the writer who represents a sense of place in a work attempts to show that humans live in an inextricable ecological relationship with the natural environment.

As Richard Astro points out, Steinbeck's sense of place enabled him to reach "a metaphysical conclusion about the unity of all experience," and Steinbeck advises his reader "to look from the tide pool to the stars and then back to the tide pool again" to learn humanity's linkage with "the whole thing." Steinbeck's view of humanity arose from his deep sense of place, that is, his detailed biological, geographical knowledge of California.

Snyder read Steinbeck when he was young, and for him Steinbeck was a source of inspiration to remain a Western writer. Such poems as "Burning the Small Dead" and "Song of the Taste" clearly show the

poet's detailed knowledge of California. In fact, the reader may see a clear parallel between Snyder and Steinbeck when the narrator's consciousness in "Burning the Small Dead" moves up from the burning branches to the stars—the pale and red fire in the distant space—and then back again to the "windy fire" on the ground. "Song of the Taste" depicts humanity's position in the food chain, which Steinbeck also implies repeatedly in *The Log from the Sea of Cortez*.

Steinbeck can be seen as a precursor of what I would like to call the Literature of Place, and Snyder is a contemporary poet who made this aspect of American literature manifest. John Muir and Mary Austin wrote with a deep knowledge of place in California, and thus Steinbeck and Snyder may be seen as outstanding successors of this literature.